Osaka University Knowledge Archive

Title	病いの子どもとともに生きる母の変容 : 苦しみと感謝をとおして
Author(s)	中西, チヨキ
Citation	臨床哲学. 2013, 14(2), p. 21-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24721
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

病いの子どもとともに生きる母の変容
―苦しみと感謝をとおして―

中西 チヨキ

はじめに

看護者[1]が、病者やその家族の話を聞く（聴く）ことは、看護においてもっとも重要な活動の一つである。症状や治療、生活上の困難などどれも、病者を理解し、適切な看護をするためには欠かせない。病者が自分の病い（病気）の体験について何ごとかを語ろうとするとき、語るという行為は単なる伝達手段ではない。看護場面では、病者が語ることをとおしてみずから変容する姿を多々見かける。限界状況におかれた或るハンセン病者は「私は悲しみと苦しみによっていろいろと教えられてきた」[2]とも語っていた。このことは、病いはある場合には、今までの生き方を変える契機ともなり得ることを示唆している。インタビューで語ってくれた病いをもつ子どもの母は、話を聴いてもらうだけでなく、「子どもが病気を患うことによって」も変わったと語られた。その変容とは、苦しみながらも「生きようとする子どもにつき添える自分の幸せや感謝」、「人生の深さ」を考えるようになったこと。また「自分がこうありたいと願う道、方向」を拓いたことであった。このような変容がどのように起こったのか、それを母のことばをとおして明らかにしたい。

研究方法[3]は事例研究である。インタビューで語られた病者の母の体験を分析する。インタビューは非構成的な方法で自由に語ってもらった。研究参加者は、研究目的であることを承諾してくれた病いの子どもをもつ母である。研究参加者[4]および表記[5]は文末に記した。

１．病いの子どもとともに生きる母の体験

ここでは、インタビュー記録のなかから、母（仮名；なみさんと呼ぶことにする）の変容にかかわる部分を取り上げて、そのまま記述した。母なみさんの話は病いの子ども（娘）[6]に関する話が主であった。子どもの経験は、私が直接聞いたのではなく、母から見た、母

が聞いた子どもの経験である。経験の記述は、方言や吃音のようなくり返し、身振りなどがあって読みづらいが、これは重要な意味をもつのでそのまま記述した。

インタビューのはじめに、あいさつをしたあと、「なんでもいいから話を聞かせてください」とお願いした。はじめは健康体操や歩行数のことなどを話されていたが、まもなく、子どもさんの病気のことを電話で知らせてもらっていたので、「子どもさんのことではずいぶん心配なさったんですよね」と言った。すると、すぐに子どもの病気の話になった。なみさんは、子どもの病いで、「ルンルン気分で楽しむ」はずだった老後の夢は潰え、「人生の後半がころっと変わっていく」と話された。しかし、一方で、「子どもが病気を患うことによって学び、生きることについて深く考えられるようになった」とも話された。まず、子どもの苦しみをともに生きる母の苦しみを記述し、その後に、そこから子どもとともに変容してゆく母なみさんの経験とその解釈を記述する。

1）子どもの苦しみを生きる

ここでは、なみさんが「子どもが生きていたくない」と言ったとき、「呼吸が苦しくて肩で喘いでいる子ども」を見たとき、「子どもが先に逝ったら」、と想像したときの苦しい経験について述べる。

（1）生きていたくない！

なみさんは、「やっとこないして話せるようになった。今、子どもはパソコン習って、その方向にいってくれたから安らげますけど」、と次のように話してくれた。

> 最初はもう、お金をかけて、みんなの重荷になってね、生きていたくない、て〔子どもが〕いうたときは(間)、(消え入るような声で)つらかった。本人がね、一番。（急に大きな声）だから真剣に向かったら、そんな話になるから、他の話ばっかりしてね。お母さんごめんねといったら、私もうたまらない（声のトーンが落ちて)。

子どもの「生きていたくない」ということばほど、母にとってつらいものがあろうか。この苦しさをなみさんは何度もことばを変えて話された。そして、最後のインタビューでは、なにかこころが解き放たれたかのように、爆発するという感じで、子どもが「生きていたくない」と言ったときの経験を話された。

なにか変なこと考えやしないかとか、前なんかはやっぱり、自殺せーへんかな、というのがすごく（強い調子で）あったんですよ。だから、そばに誰かいて目が離せなかった（沈んだ声）。

もう、神も仏もないもんかっていうような感じですごく落ち込んで、なんで、なんでわたしたち、悪いことしたのーって（強い調子で）、なんで娘なのー、（間）なんでいけずするのよ……。だからすごく、（間）ま、一番落ち込んだときは、やっぱりあの子からのことばで、あの子の首しめて自分も首つり自殺しようかっていう……。

くり返し、ちがったことばで表現されるなみさんの苦しみは、子どもが「生きていたくない」と言ったときの経験であった。このことばに母は「子どもが自殺するかもしれない」と不安と恐怖で、目が離せなかった。それは「あの子の首をしめて首つり自殺しようか」と思うほどの衝撃を母に与えた。この衝撃の経験は母なみさんのこころに深く刻まれ、折りあるごとに湧きがってくるらしく、何度も何度も語られた。「神も仏もあるもんか」という激しいことば、「私たち悪いことしたのー、なんで娘なのー」、という母のこころの叫びは、母の傷みの深さを表している。

（2）頭がおかしくなりそう

肺機能の障害によって起こる子どもの呼吸の苦しさは、母のこころを激しく揺さぶった。その場面での経験を次のように話された。

もうどういうんかな、ほんまにね、こう、こうして、こんな感じですよ、と（正座して両手を膝の前について前かがみなり、なみさんはその姿勢を実際にして見せて）こういう感じが一番、これでも肩で息してるんですよ。ほんで犬ころが上向く感じで、だから哀れというかなんかね、生かしてやってることが酷、という感じ。もうその、ハーッて（深く息を吸い込んで）、ほんで、横になったら横になるのがしんどいっていうんですよ。これが一番楽だ、いうんですよ。もう、その姿がほんま頭がおかしくなる、それ見た時にね。

呼吸が苦しくて、「犬ころが上を向く」ような姿をして、肩で喘ぐ娘を目の前にして、

いつ息が途絶えるかと不安と恐怖に駆られ、それはそのまま「頭がおかしくなる」ということばに現われている。「犬ころのように」ということばは、わが子の姿が動物である犬に喩えられ、この比喩が母のはかり知れない哀しみの深さを強調するようであった。その意味は、絶えそうな子どものいのちへの怖れだけでなく、「哀れで生かしておくのが酷」ということばそのものが表している。呼吸がいつ止まるかという恐怖と犬ころのように見えたという娘の姿に抱いた、母の言いようもない哀しみの深さを、「発狂しそうな（別な場面で表現された）」ということばが直に伝えてくれる。

（3）子どもが逝ってしまったら

なみさんがもう一つ、一番つらいこととして話されたのは、子どもが「消えてしまったら」と想像したときのことである。なみさんは「死」ということばは決して使わず、「あと２年くらいかな」、「消えちゃったとき」というふうに話された。

> もう一番つらいのはね、後２年くらいちがうかな、という気持ちがすーっと過ったときがすごくつらい。２年くらいで手術に入るでしょう。そして 40％の確率ね、（間）成功率がすごく不安なんですよ。ほんまに（力を込めて）代われるもんなら代ってやりたい（声をつまらせて）だけどなんかね、いやー、もしこれが、ね消えちゃったとき、と思ったら、どない、どないなるんかなとかね、そうそうそうね、想像したらね。……でもね、ずーっとね、そんな口にしたくないけど、もし、〔子どもが〕先に逝った場合、仏教的にもそんな雨は必ず止むとか言うけれど、苦しみ悲しみいうのは忘れる、忘れるじゃなくて、ずーっと、ま、その、（間）生きてる限りはつづくんじゃないかな。

子どもが「先に逝ったら」とは、成功率の低い手術が２年先に予定されていて、それは母にとっては現実のことである。その想像は、なにものにも代えがたい子どものいのちを自分のいのちと「代わってやりたい」と思わせた。雨は必ず止むというが、母には「子どもが先に逝った場合」の苦しみ悲しみは、「生きている限りつづく」のである。「声をつまらせる」言い方、「どない、どないなるんか」、「そうそうそうね」、「忘れる、忘れるじゃなく、……」という、ためらい、言いまどうし方そのものに、起こり得る子どもの死に対する母の怖れと悲しみの深さが現われている。

2）子どもの変容に感謝する

前は、「子どもは、お見舞いに来た健康な友人に、息もできない自分をじっと見られるのがつらかった」。今は、「子どもが自分から会いに行こうかな、とやっと、そんなふうになれた。元気になったら温泉行こうね、ずいぶん変わってきた」と、なみさんは話された。

（1）子どもの一歩から

発病当初から６ヵ月以上ものあいだ、閉じこもっていた家から外に出て、子どもはお友達に会いに行くほどに変化した、となみさんは話された。その変化が気になって、私は「何がきっかけで、閉じこもっていたところから出かけるようになられたんでしょうね」と尋ねた。

> 社会保険などの手続きは本人がしなければだめでしょう？ 誰か家に来はっても、インターフォンですまし、絶対出なかった。でも役所に出て、ほんで障害者の人にめぐり合って……。

子どもが一歩外に出たということは、母なみさんにとっては、僥倖とも思える行動であったであろう。この一歩で障害者とめぐり合うことになり、子どもが変わっていくきっかけとなった。そのときのことをなみさんは、さらに次のように話された。

> 身体障害者のなかに入って、あの子は自分以上に努力している人、いっぱい目のあたりにして、もっと自分もがんばらなあかんいうて、娘には、義務感、子ども（娘の）が二人いるじゃないですか。どんなことしてでもね、自分が生きてる限りはやってやらないかんて……。今まで、落ち込む一方やったのがね。ああ、神さんか仏さんかしらんけどなんか助けて下さって。だからちょっとずつね、悪いなかでいい、いい方へ、ほっとして。

身体障害者との出会いで、子どもが自分もがんばらなければ、と思った。そのように変わってゆく子どもを見て、なみさんがどれほど「ほっと」したか、それは、「ああ、神さんか仏さんかしらんけどなんか助けて下さって」、というなみさんのことばに、そのまま

現われている。なみさんは生き生きとはずむような感じで話された。

今は、ああ、あの、〔車いすの人を〕見かけたら、子どもは必ず押してあげてーって。人を思いやる心、人の痛みいうのがね、わかってくる。だから、今までは、帽子かぶってマスクして、もう、それこそ銀行強盗やるんかなというくらい〔酸素吸入用の鼻腔カテーテルを〕隠してたんが、正々堂々と、マスクはぜんぜんしないし、その恥ずかしいとかふっ切れてね、感謝で……。この頃ぜんぜん違う。全部プラス思考ね、変わってきた。

自分のことではなく、困っている人を見かけて、手助けする子どものようすが、母なみさんを生気づけ、生き生きとさせているようであった。「正々堂々と、マスクは全然しないし、恥ずかしいとかふっ切れた」ように感じられる子どもを見て、なみさんは感謝すると言われた。これらのことばに込められたなみさんの想いは、「この頃はぜんぜん違う、全部プラス思考にね、変わってきた」、という歯切れの良さに現われているようであった。

（2）海外旅行へ行ったら？　気の毒に

「生きていたくない」という子どものことばに目が離せなかった母なみさんは、子どもが一歩外へ出て、障害者のなかに入ってパソコンに打ち込む子どもの姿にほっとしていた。そのようなときに、身体障害者の母親や親戚、他のみなからも「海外旅行とか行ったほうがいいんじゃないか」とか、「気の毒に、なぜそんな苦しみを背負わなければならないのか」と言われた。このことばになみさんは、怒りのこもった口調で次にように話された。

でもね、あのね、身障のお母さんにも、「海外旅行とか行ったほうがいいじゃない」といわれたときに、ただ、あたしにしたら、毎日外に出てくれる、ああ、もう、いやだいやだと思ってたんが、〔それを〕忘れて一つでも打ち込んで、人間の価値観てね、生きてるあれって、海外旅行行って楽しくて、そんなんに、（間）あれがあるんかなーって、そうじやなくてかすかな望みに向かってしんどいけれど、どういうかな、苦しいけどやっていくそんなんに（間）……。

親戚なんかでも、気の毒やね、何も悪いことしてないのにということばを聞くと、人生の終りにきてね、気づいてなかったこと、この子の病気によってすごく学ばせて

もらって。最初の時は歩いててすごく不安だったけど、この子はこの子なりに生に向かって1日でも、充実してるんやなと思って。それに付き添える自分をすごく幸せやなと思って。今、全然ちがいますよね。

子どもが「悪いなかでもいい方向に向かって、ほっとしている」そのようなときに投げかけられた「海外旅行へ行ったら」、「気の毒やね」ということばに対して、母なみさんのなかに湧き起こったのは「人間の価値観、生きていることとは、かすかな望みに向かって、……」という生き方であった。また、「生に向かって1日でも充実している、その子に付き添える自分は幸せ」であった。これらのことばは、治癒の望みを持ち得ないいのちと向き合い、ぎりぎりの状況のなかで生きている子どもとともに生きている、母の祈るようなこころを表しているようであった。同時に、母なみさんの強い意志や1日を充実して生きていることに価値を見い出す、母なみさんの豊かさが浮き彫りになって見えるようであった。

（3）子どもが病気を患うことによって

なみさんは「子どもが病気を患うことによって」、ということばを「この子の病気によって」、「娘が患うことによって」、「娘があれになることによって」、「娘のおかげで」などいろんな表現のし方で話された。ここでは二つの場面を記述した。

娘がそういう病気を患ったことによって、私自身がね、いろんなこと学ばせてもらっている。やさしい人の親切に涙しながら、ものすごく充実していると思うんですよね。だから、何でもかんでも感謝でね、ものがいえるようになった。前は自殺せーへんかなというのがすごくあって、だれかそばにいて、目が離せなかった。

〔人生の〕終わりに来てね、気づいていなかったこと、経験できなかったこと、この子の病気によってね、まあ、ありがたいんだよ、最初は落ち込んでいたけどね。

「子どもが病気を患うことによって」ということばで、なみさんが言おうとしているのは、〈発病当初〉は、「自殺しないか目が離せなくて落ち込んでいた」。しかし、〈今〉は、「いろんなことを学び、感謝し」、「人生の終わりに来て、経験できなかったことを経験し、ありがたいと思う」ようになった。このように母なみさんは、発病当初の自分と、いい方に

変わってきている自分を伝えようとしているようであった。

2　苦しみと感謝をとおして変容する

前項では、子どもの病いの苦しみを、自分の苦しみとして生きてきた母なみさんの経験を記述した。また、その苦しみのなかから子どもが一歩ふみだし、変わっていくさまを見て、自分が変わったという母なみさんについて述べた。子どもの病いに苦しむ、あるいは悦ぶ母なみさんの変容はどのようにしてか、最初の問いにもどって検討する。

1）子どもの苦しみは母の苦しみ

どうにもならない病いに子どもが苦しむとき、母なみさんは、自分自身が代わってやりたいと思うほど苦しんだ。子どもと母が苦しむ、この病むこととはどういうことか、また、子どもの苦しみを母はどのように捉えていたのかを、まず見てみたい。

（1）苦しみの受け手として

病者 patient は、まさに「耐える者、身体の病いに苦しむ人。（……）外の動作主 external agent から発した《印象》impression を受けとめるもの、受け手」[7] であった [8]。病いに罹るという「罹る」とは、「こうむる、身に受ける、病気になる」[9] ことである。ヴァイツゼッカー [10] は、「生命を『苦しむという形で受けること』Leiden、或いは（……）生命を『蒙る』Erleiden 」[11] ことだと言う。それはまた、子どもとなみさんが受けた病いの苦しみでもある。この受動性についてヴァイツゼッカーはこうも言っている

> 生命はまた、存在せねばならならぬというはめにおちいっているのであって、その限りにおいてまた、受動的でもある。この点に関してわれわれの述べるところは、存在的なるもの Ontisches のみにかかわるのではなく、パトス的 [12] なるもの Pathetisches にかかわっている。そして生命のパトス的な属性については存在的属性についてと同じ仕方では論じられない [13]。

ヴァイツゼッカーによれば、パトス的という語が言おうとしているのは、「実存 / 生存 Existenz が措定 gesetzt されているというより〈受け取られている Erlitten〉ということ

である（〈　〉による強調は引用者）」[14]。「受け取られている」ということは、今生きている私が、私に受け取られる過程を直接見たり聞いたりしているということではない。気づいたときには私はすでに私に「受け取られていた」ということである。このことはまた、ヴァイツゼッカーが言うところの「生命とは《受苦的に蒙る》もの erlitten でもあることを明確に表明することなしには、有機体や生命についての真理に即した物の言い方はできないのだという洞察を不可避ならしめること、これが悟性の要請でもある[15]」ということを言い表している。

これを、なみさんの場合に当てはめてみると、子どものいのちは、すでに子どもに〈受け取られている〉。子どもの生は、今、病いに罹っており、子どもはその病いに苦しんでいる。母なみさんは子どもの苦しみをともに苦しんでいる。それは事実である。子どもと母が苦しんでいるこの苦しみを、「蒙るもの」であると明確に表明すること。これが、真理に即した物の言い方である。そして、それを、子どもも母も看護者である私も「真理」として洞察することを要請されている、ということである。子どもと母の苦しみを「蒙ったもの」として改めて観ると、それは、あまりにも過酷なもので、その峻厳さにどのように向き合うのか。看護の実践者として私自身が問われなければならない[16]。

（2）子どもの苦しみは母の苦しみ

健康でふつうに暮らしていた子どもの今までの生活が、病いによってとつぜん断絶した。変貌してしまった子どもの生活は、母なみさんの生活をも一変させてしまった。「生きていたくない」という子どものことばは、母なみさんを震撼させ、「子どもの首をしめて自分も首つり自殺しようか」とさえ思わせた。また、呼吸が苦しくて肩で喘ぐ子どもの姿は、母に「生かしておくのが酷」で、「頭がおかしくなった」と言わせた。子どもが先に逝ったら、と想像する母なみさんにとっては、「生きているかぎりつづく苦しみ悲しみ」であった。これらのことばは、子どもの苦しみは、そのまま母なみさんの苦しみでもあることを表している。そこには「根源的な母なる性（さが）から発し、そして女性の献身への準備性から生ずる昇華の産物」である[17]母としての姿がある。「これからの人生を子どもに捧げる」、「代われるものなら代わってやりたい」という母なみさんのことばには、母だからこそもつ子どもを失うことへの言いようもない苦悩が現われている。家族の死の重みについて、柳田邦男[18]は、次のように述べている。

友人・知人や医療者をはじめ無縁の他人に至るまで、「彼（彼女）の死」といえる死、つまり「三人称の死」があります。(……)、ところが「二人称の死」すなわち「あなた」という関係にある人の死が持つ深い意味は、一般的な死の概念に照らしてもわからない。

生物学的ないのちは本人固有のものであるにしても、精神的ないのちは生活と人生を分かち合った人と共有している部分が多い。だから誰かが死ぬということは、死にゆく本人だけの問題ではないのです。その人の生活と人生を共有した二人称の立場の人のこころのなかでも、同時になにかが死んでゆくからです。そこが「二人称の死」の特別に大事なところなのです[19]。

「誰かが死ぬということは、死にゆく本人だけの問題ではないのです」、という柳田のことばは、母なみさんが言った「決して自分だけの問題ではない」ということばと重なる。

あの子の〔生きていたくない〕ということば、もしそれ〔自殺〕したら孫たちがそれを背負って生きなきゃならない。だからなにしてでも生きのびなくちゃならん。生きることはすごくつらいことやけど、〈決して自分〔子ども〕だけの問題ではない〉(強調は引用者)。そういう負担を孫たちに背負わしてはいけない。

子ども(ここでは娘と呼ぶ)が自殺するということは、「決して娘だけの問題ではない」と、なみさんが言うのは、孫や母なみさんにとって重大な意味をもつからである。というのは、もし、娘が自殺したら、孫はそれを背負って生きなければならない。娘が死ぬということは生物学的な娘の身体が死ぬというだけではない。たとえば、娘はスポーツが得意で、「運動会で走ったり、球をころがしたりしていっぱい賞品をもらった。孫たちは大喜びだった」。娘と共有したこの「喜び」が、孫たちのこころのなかでも死んでゆくからである。娘の死は孫にとってだけはなく、母なみさんにとっても重大な問題であった。「娘が先に逝ったら」と想像したときの母なみさんは、自分が生きている限りつづく苦しみ悲しみ」だった。母にとっての娘の死は「特別に大切」なことだからである。

2）子どもと母の悦び

今述べた、母なみさんの狂おしいような苦しみも、子どもの一歩からいろんな人に出会

い、いろんな経験をして母自身が前向きに変わっていった。その変容はどのような過程を経ていくのだろうか。

（1）子どもの一歩から

なみさんは、現実に起こった出来事を語るときに、前と今を対比して語られた。私は、その対比のし方がずっと気になっていた。そこで「最初はとてもつらい思いをなさって、今は、なにがきっかけで閉じこもっていた状態から前向きになられたんでしょうね」と、問いかけた。それにすぐ応えて、なみさんが話してくれたのは、前に述べた次のようなことばであった。

> 社会保険などの手続きは本人がしなければだめでしょう？ 誰か家に来はっても、インターフォンですまし、絶対、出なかった。でも役所に出て、ほんで障害者の人にめぐり合って……。

家の外に出て役所に行く目的が「保険の手続きのため」だったことは、私にある驚きを感じさせた。というのは、保険の手続きをするのは、現象としてみれば、生きる糧を得る一つの行動である。しかし、これは何を意味するのだろうか。生命と生活の危機のなかにあって、子どもの身体は、「環界のさまざまな事情に対応するような運動を形成」[20] しなければならない。障害された子どもの肺機能と生活環境とが、この出会いにおいて対応する場合にこそ、子どももまた、生活環境のなかで「安全と確実性が保証される」[21] のであるから。子どもが外に出たことは、断絶した生活を修復し、子ども自身が生きやすくなる第一歩だったと思われる。「ああ、神さんか仏さんかしらないけれど、助けて下さって」というなみさんのことばは、こころの底から「ほっと」した母なみさんの心情を言い表している。この「ほっとした」は、明らかに子どもがみずから「生きよう」とする意志の現われとして母なみさんが受けとめたことを表している。

（2）出会いのなかで

子どものこの一歩は、子どもとなみさんが障害者の母や他の人たちと出会い、今まで経験したことのない世界を見ることにつながった。なみさんの言うところによると、子どもは、「学校が楽しい」と言い、身体障害者のなかに入って、「自分よりもっと努力している

人たちを目のあたりにして、自分もがんばらなあかんと思うようになった」。このような子どもの変容と同時に、「今、まったく違いますよね」と言うように、明確に母なみさん自身が変わったことをみずから表明している。このような結果を促した「出会い」について考えてみる。

「海外旅行へ行った方がいいんじゃない」とか、「気の毒に、何も悪いことしてないのに」ということばに対して、母なみさんは「そうじゃない」と否定した。パソコンに打ち込んでいる子どもを見て、やっとほっとしていた矢先にかけられた「海外旅行へ行ったら」、「気の毒に」ということばに、母なみさんは少なからず怒りを感じたようであった。そのような状況下で発されたのが、「人間の価値観て、生きることって、かすかな望みに……」、「生に向かって生きている子どもに付き添える自分は幸せ」という前向きのことばであった。私たちは日常の生活のなかでは自分の価値観や生き方はほとんど意識しない。しかし、「海外旅行行ったら、気の毒に」ということばになみさんは傷つき、それが怒りの情動とともに「苦しくても……幸せ、感謝する」という価値観や生き方として湧出したのではないだろうか。このことは、障害者の母たちとなみさんが「互いに相手を生み出していた」[22]ことを表している。かけられたことばになみさんが怒りをもったとしても両者のあいだは相互に関係しあっていたのである。母なみさんが「海外旅行に行くこと」にではなく、「生に向かって生きている子どもに付き添える幸せ」、「かすかな望みに向かってやっていく」ことに「人間が生きることの価値」を置くと言うのは、母なみさんが自分も死にたいと思うほど子どもの苦しみを苦しんだからこそではないだろうか。つまり、なみさんが過去の苦しかった経験と今の幸せとの対比のなかで生まれたなみさんの価値観だと言えるのではないだろうか。

3　苦しみと悦びの経験を通して変容する

母なみさんが変わったことのもう一つの契機は、「自分の話を聞いて（聴いて）もらうこと」だけではなく、「子どもが病気を患うことによって」、でもあった。なみさんは、「この子の病気によって」「かえって子どもが患うことによって」、「娘があれになることによって」、「娘のおかげで」など、いろんな表現のし方でその経験を話された。「子どもが病気を患うことによって」とはどういうことであろうか。

1）子どもが病気を患ったことによって

「子どもが病気を患ったことによって」、母なみさんが変容する、という意味を明らかにするために、先に述べた二つの場面をもう一度取り上げて、それがどのような文脈で語られているのか、それを手がかりに考えてみる。

①娘がそういう病気を患ったことによって、私自身がね、いろんなこと学ばせてもらってる。ものすごく充実していると思うんですよね。だから、なんでもかんでも感謝でね、ものがいえるようになった。前は自殺せーへんかなというのがすごくあったんですよ。今までやったら自分の甲斐性でね（強い口調で）食べてると思ってたけれど、物一つ食べるにしてもいろんな人の手ね、いただいている感謝（考えながら）、前は頭でわかってたけれど、そんな日々感じなかったことが、……人生なんて価値観なんてその人が感じるものであって……。

②〔人生の〕終わりに来てね、気づいていなかったこと、この子の病気によってね、まあ、ありがたいんだよ、最初は歩いててすごく不安だったけど。

これらの文脈から、「子どもが病気を患うことによって」ということばでなみさんが言おうとしているのは、つらかった「前」の経験と、よい方向へ向かっている「今」の経験であることがわかる。このことを先に述べた母なみさんの語りから、少し詳しく見てみよう。「前」のつらかった経験とは、子どもが「生きていたくない」と言ったときの、「子どもの首をしめて首つり自殺しようか」と思うほどの苦しみの経験であった。また「呼吸が苦しくて肩で喘いでいる」子どもを見たときの、「頭がおかしくなりそうな」経験であった。そして「子どもが先に逝ってしまったら」と、想像したときの「生きているかぎりつづく苦しみや悲しみ」の経験であった。よい方向に向かっている「今」の経験とは、母なみさんが学んだ、「かすかな望みに向かって……。この子は 1 日でも充実している、それに付き添える自分の幸せ」であった。また、「自分が感謝でものがいえるようなった」ことであった。つまり、「子どもが病気を患うことによって」変わったとは、子どもが病気を患った〈最初の〉「苦しかった」経験から、〈今の〉「幸せと感謝」へと、母なみさんが変化したことを指していた。

ところで、「子どもが病いを患うことによって」の意味には、もう一つ、子どもが〈病気になる前〉と、〈病気になった後〉の母なみさんの経験の違いがあった。具体的には、

子どもが健康でふつうに生活していたときは、なみさんは自分の甲斐性で食べていると思っていたけれど、子どもが病気を患うことで「今は」、物一つ食べるにしてもいろんな人の手をいただき感謝する自分へと変化した。また、子どもが健康でふつうの生活をしていたときには、頭でわかっていたけれど、日々感じなかったこと、気づいていなかったことを、「子どもが病気を患うことによって」、今まで経験しなかったことを経験し、感じたり気づいたりするようになった。人生の終わりに、人生は深いものだと学び、かすかな望みに向かって生きている、そこに幸せや生きることの価値を見いだした。すなわち、「子どもが患うことによって」というのは、このようななみさん自身の意識の変化であった。この変容は、子どもの苦しみをともに苦しむという一つの存在様式から、幸せや感謝を生きるという他の存在様式への移行[23]を実現したということであろう。

2）こうありたいと願う新たな道

そして、最後に私は「5 回おじゃまさしてもらって、いろいろ話してもらったんですけど、何か気づかれたこと感じられたこと、何か変わったなと思われることはおありですか」と問いかけた。それに応えてくれたのが、次のようなことばであった。

> ふつうに何もなく過ごしていたら、ただそのときその場を楽しく過ごせて、元気にころって逝けたらいい、という単細胞的な考えだったけれど、あの子が病気したことと、その、聞いていただくことでね、自分を分析するいうたらおかしいけれど、こうありたいて願う、指針いうかな、道みたいなんが、方向付けいうんか、顧みながら思える。些細なことであっても、もっと人生には深いもんがあるんだよって、ありがたく感謝すべきだよって……、なんでも裏表あるように。だから、お話しすることで、案外そのまま過ごしてしまうことでも、より深く（笑い）考えるようになれた。そこんとこは変わったんじゃないかな。ただ、花を見て美しいて思うんじゃなくて、美しく咲かすためにはその、今までの過程にいろんな人のアイデアとか、そんな受けながら自然の恵みを受けながら、今咲かしているんだよって感じ。花にもつらいときとかあってね、愛でてもろて、喜んでいる姿だなという感じ。だから、（間）ただ単に感激する、（間）多分、今までだったらそれ止まりだったと思うけれど、（間）だから子どもに自分自身を強くしてもらったという感じありますよね、ものすごくね。

「あの子が病気したこと」で、「自分がこうありたいと願う、指針いうか、道みたいな、方向付けというか」〔ができた〕というのは、幸せを感じることや感謝することとは別の次元[24]の変容だと考えられる。「自分がこうありたいと願う道、方向づけ」は、たとえば、「神も仏もないものか」と苦しみ、「神さんか仏さんか助けて下さって」というほど悦び、感謝したそれらをなみさんが「顧みて」、そこから現われ出てきた、「自分の願う道」ではないだろうか。それは「些細なことでも人生には深いものがある」ということばで言い表わされているものである。また、花がただ美しい、ではなく、そのためには「人のアイデアとか自然の恵みを受けて……」のように、なみさんのまなざしが、美しい花を咲かせた自然や物、人に向けられていることである。別な場面でなみさんが「なにか目に見えないものを学んでいるようだ」と言ったのは、直接目に見えるものだけではなく、美しく咲かすための背景にある目に見えないものを見ていることを表していると考えられる。

なみさんが「顧みて」というとき、それは、子どもが病気を患ったときの経験であっただろう。具体的には、母なみさんは子どもが病気になったことで、想像を超える苦しく悲しい体験をした。また、今まで知らなかった障害者や他の人々と出会い、幸せと感謝のこころを知った。それは子どもが健康であったときには経験したことのない世界であった。つまり、なみさんが顧みてというのは、実際に経験した苦しみや悦びだった。また、その経験をさまざまに語ったことでもあったと考えられる。それらの経験が最後のインタビューでの語りのなかでなみさんに捉え直されてすべてが一つに統合され、そこから浮かび上がったものが、なみさんが拓いたもう一つの「自分がこうありたいと願う道、方向づけ」だったと考えられる。メルロ＝ポンティは現象学的世界について次のように述べている。

> 現象学的世界とは、(……)、私の諸経験の交叉点で、また、私の経験と他者の交叉点で、それら諸経験の絡み合いによってあらわれてくる意味なのである。したがって、それは主観性ならびに相互主観性ときり離すことのできないものであって、この主観性と相互主観性とは私の過去の経験を私の現在の経験のなかで捉え直し、また他者の経験を私の経験のなかで捉え直すことによって、その統一をつくるものである[25]。

なみさんが拓いた新たな「道、方向」は、なみさん自身が「こうありたいと願っていた道、方向」であった。なみさんは、些細なことでも深いものがある、美しい花もその背景に人や自然のめぐみがあると語られた。なにごともなく過ごしていたときには見過ごしてしま

うことも、より深く考えられるようになった。なみさんは「そこが変わったんですね」と語られた。このことばは、なみさん自身が人生の深さや見えないものを見ている自分に満足しているようにも感じられる。同時に、変わった自分をなみさん自身が確かな手ごたえとして感じているとも考えられる。この変容の確かさを再確認するような「そこが変わったんですね」というなみさんのことばは、私たちが「(……) 常に自己同一的な象徴を求めている」[26] ことの現われと言えるのかもしれない。

おわりに

インタビューで語ってくれた病いの子どもの母のことばをとおして、子どもが病気を患うことによって母が変容するとはどういうことかを検討してきた。病気を患うことは、一挙に別の世界へ移行することでもあるが、そこからあらたな一歩を踏み出させることでもあった。母は子どもの病いをともに生きるという新しい経験を語ることをとおして幸せと感謝のこころを見出し、そこに自分の生きる価値を見いだした。そしてさらに、語ることをとおして見いだされた幸せや感謝のこころ、生きる価値などのすべてを最後に顧みたとき、それらは一つに統合され、それが「自分がこうありたいと願う道、方向」を拓いたと考えられる。

次の課題は、母なみさんが言うところの、変容にかかわるもう一つの「聞く（聴く）こと」、そして、「語ること」とはどういうことか、である。これについては稿を改めて論ずることにしたい。

注

1　看護職は、看護師だけでなく保健師、助産師も含む。看護者とはこの看護職全体を言う。

2　神谷美恵子『極限の人－病めるひとととともに－』、ルガール社、1973、p. 52.

3　具体的な研究方法：インタビューでは病者の関心にしたがって自由に語ってもらった。インタビューは研究参加者の自宅で行った。1 ヵ月に 1 回 5 回行った。インタビューでの語りは逐語記録にした。

4　研究参加者：61 歳の女性で 70 歳の夫と 2 人で暮らしている。子どもは 3 人でそれぞれ結婚し別に暮らしている。子どもは、夫と子ども 2 人の 4 人で暮らしている。子どもは 8 か月前に治癒の望めな

い肺疾患に罹り治療法は手術しかないが成功率が低く再発の可能性もある。障害者の学校でパソコンを学んでいる。母は子どもに付き添っている。

5　表記：「　」テキストの引用。（　）語り手の非言語的表現、間や声の調子、身ぶりなど。〈　〉筆者の強調。〔　〕筆者の補足。

6　母なみさんの子どもの呼び方は、母なみさんが「娘」と言っている場合と、娘とその子ども（なみさんの孫）との関係を取り上げた場面でのみ「娘」と呼ぶ。

7　J.A.SIMPSON and E.S.C.WEINER　*THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY*　SECOND EDITION ,CLARENDON PRESS・OXFORD,1989, pp. 342-343.

8　生命、病いの受動性については拙稿「看護における語ること聴くことに向けて」（『メタフュシカ』32号、大阪大学文学部哲学講座、2010）で述べた。ここではその考えをもとに、病いの子どもを介護する母の経験のもつ意味を分析する。

9　「罹る」、新村出編『広辞苑』、岩波書店、1930、p. 743.

10　V. フォン・ヴァイツゼッカーは、神経生理学者、神経内科医である。「生命あるものを研究するには、生命と関わりあわねばならぬ」（V. フォン・ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス―知覚と運動の人間学―』、木村敏・濱中淑彦訳、みすず書房、1975、p. 3）。ゲシュタルトクライスとは、「変動と生成の総括概念」（同上、p. 8）で、「生物学、医学、哲学的のそれぞれと境を接している」（同上、p. 25）。「臨床医学を中心にし、医学的人間学を目標とする活動が志向されている」（同上、p. 25）。このような志向は、誕生や死、生命や病い、あるいは病者と看護者・その環境にかかわる看護実践を根本から支え、その意味で不可欠である。

11　同上、p. 292.

12　存在的は「ある」の言表がすべてを言い表している。存在的の語で表現しようとしているのは、むき出しの存在 das nackte Sein がすべてである。これに対してパトス的とは、われわれが「生きもの」Lebewessen と呼んでいるものたちについては、一連の「私は」という言表が本質的である。そこには「ある」の性格はまったく含まれていない。ヴァイツゼッカー『生命と主体―ゲシュタルトと時間 / アノニューマ』、木村敏訳・註解、人文書院、1995、p. 92.（木村敏の註解ではなく、ヴァイツゼッカーの本文からの引用である）

13　ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』、p. 291.

14　ヴァイツゼッカー『生命と主体―ゲシュタルトと時間 / アノニューマ』、p. 92.

15　ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』、p. 92.

16　「生命とは《受苦的蒙るもの》……」の意味については、次の課題である「聴くこと」の稿で改めて

検討する。

17　G. シュヴィング『精神病者の魂への道』、小川信夫・佐渡川佐知子訳、みすず書房、1966、p. 41.

18　「わが子の死の体験は、これまで書いてきたものとは、月とスッポンほどの違いがあります。(……)脳死に陥ったわが子を看取った十一日間に感じたのは、もっと別のものだったんです。全身をえもいわれぬ感覚が襲ってくる。それをあえて言語化すると『人称による死の違い』ということになります」。柳田邦男『いのち　8 人の医師との対話』、講談社、1996、p. 275.

19　同上、pp. 276~277.

20　ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』、p. 278.

21　同上、p. 290.

22　同上、p. 250.

23　神谷美恵子『極限の人－病めるひとととともに－』、p. 63.

24　次元 : 表現操作は、うまくいった場合には、……テクストの深部そのもののなかに意味を一つの物として存在するようにさせ、その意味を語のつくる有機体のなかに生きるようにさせ、その意味を作家または読者のなかに一つのあらたな感覚器官として植えつけ、われわれの経験に一つのあらたな領野または次元をきり拓くのである（M. メルロ＝ポンティ『知覚の現象学 I 』、竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967、p. 300)。ここで述べているのは、なみさんが見いだした「自分の願う道や方向づけ」をあらたな次元として捉えている。

25　M. メルロ＝ポンティ『知覚の現象学 I 』、p. 23.

26　ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』、p. 300.